

2つの被災地支援レポート

長崎大学病院では、震災から半年過ぎた今も、主に福島県内を中心に、継続した被災地支援を続けています。そのひとつが永井隆記念国際ヒバクシャ医療センターの活動。熊谷敦史先生にお聞きしました。

「私は震災の3日後に福島県庁に、そして4日後に福島医大に入りました。被災した医療が専門ではない方々ばかりで皆さん動揺されていたので、私たちが主体となってシステムの構築や、患者さんの受け入れマニュアル作りなどに携わりました。正確な情報も得にくいなかで進めていくのは大変でしたね。しかしその後、リスクコミュニケーションの活動などを通して情報共有していきながら、今では地元中心の医療体制が築かれつつあります。今後は一般住民の不安に対処していく活動が中心になるでしょう」

長期化する被災地の状況の中で、「どうするのが地元にとって一番いいかを念頭に置いて活動している」という熊谷先生の言葉が印象的でした。



▲右から片峰学長、須藤理事、熊谷助教、山下教授。



被災地での指導の様子。長崎大学のジャケットを羽織って活動していると、被災者の方々がみんな感動し、安心して心を開いてくれたのだとか。

また歯科医療チームがかなり早くから現地入りしていたのも、長崎大学の大きな特徴でした。長崎県歯科衛生士会の一員として、長崎大学病院の医療チームに加わり現地入りした猪野恵美さんにお話を聞きました。

「歯科医療のチームは、4月はじめから5月いっぱいまで被災地に入り、現地の歯科医師会にバトンタッチしながら継続支援を続けました。その後、長崎市歯科医師会も支援に向けて動き出しています。そもそも阪神大震災の折、被災者の口腔ケアが十分でなく、誤嚥性肺炎で亡くなる方が多かったことをふまえ、被災直後から口腔ケアを呼びかけてきました。その結果、誤嚥性肺炎で死亡した方は1名のみ。かなり効果があったと思います」

自身も被爆2世という猪野さん。「そこに人が暮らしている以上、誰かが入ってサポートしなければいけない。それなら自分が行くことに意味がある」と手をあげたのだそうです。

特集

長崎大学は東日本大震災で何をなしてきたか



1 長崎丸
2 救援物資の積み下ろしの様子
3 大槌町の医療拠点
4 福島での被災に関する講演
5 2枚の写真は大槌町の被災地と避難所の様子

求められる支援をより速く的確に

今年、長崎大学は、新たな個性を發揮しました。それは「現場に強い大学、危機に強い大学、行動する大学」であるということ。

3月11日に発生した東日本大震災。

この未曾有の災害を目的の当りにして、誰もが茫然自失だったとき、長崎大学はいち早く動きだしたのです。直後に岩手入りした熱帯医学研究所の山本医師。その後連携する医療チームが甚大な被害の大槌町に医療拠点を作りました。また14日には水産学部の練習船「長崎丸」が学生も同乗して救援物資を満載し出港、福島県いわき市の小名浜港と岩手県宮古市宮古港に入港しました。3月15日には国際ヒバクシャ医療センターの医療チームが福島県立医科大学で活動を開始。以来、専門の

先生方による被災地支援は今も続いています。学生たちの多くも、ボランティアで被災地での活動に身を投じるなど、大学ぐるみで支援体制を築き継続しているのです。

その積極的な活動は全国でもトップクラス。世論の評価も高く、それが「現場に強い、危機に強い、行動する」といった個性として表出したのです。しかしこれらは長い歴史と、ここで学んだ先人たちの努力の蓄積があってこそ発揮されたものでしょう。

全学同窓会のみならず、思いをひとつにして長崎大学の社会における存在感をさらに高め、発展を目指してまいります。

地震発生からの長崎大学の動き

- 2011.3.11 ● 東日本大震災発生
- 3.12 ● 長崎大学病院 緊急医療チームDMAT出動
- 3.13 ● 熱帯医学研究所の山本太郎教授、被災地に向けて出発
- 3.14 ● 水産学部の練習船「長崎丸」、被災地に向けて出港
- 3.15 ● 国際ヒバクシャ医療センター医療チームが福島県で活動開始
- 3.19 ● 山下、高村両教授が福島県より放射線健康リスク管理アドバイザーに任命
- 3.19 ● 被災地支援募金活動が大学内でスタート
- 4.1 ● 福島県からの依頼に応え、南相馬市で医療支援チームの展開が始まる(以降5月末まで継続)
- 6.1 ● 長崎大学病院独自として被災地の医療支援を継続することを決定。(4月からのべ100名以上が被災地入り)
- 6.5 ● 学生たちによる被災地サポータープロジェクト「長崎Sip-s」主催の被災地支援市民フォーラム開催
- 10月現在 ● 医療支援を継続して実施

迅速な動きを大学OBネットワークが陰で支えたのではないか



昭和50年3月
長崎大学水産学部卒業
鶴水会常任理事
長崎大学水産学部 教授

長崎大学全学同窓会代表幹事 高山久明

今回の大震災における長崎大学の対応の速さ、実行力は、我々同窓会をお世話している人間から見ても「実によくやっているなあ」と感嘆するものでした。特に被災地医療では、原爆を体験し、チェルノブイリで研究を重ねてきた実績をフルに活かした働きをしており、先生方の「福島の力になりたい」という純粋な想いに心打たれました。

全体を見渡してみても、長崎大学と長崎県

や市、その他様々な組織との連携も見事で、これらは我が大学OBが各界で活躍していることとも無縁ではないように思われます。つまり情報の流れや意思疎通の場面において、同窓生の繋がりが功を奏したのではないのでしょうか。

私ども全学同窓会も、従来の学部の垣根を越えて、今回の長崎大学の成果を評価しながら、今後を見守っていきたいと思っています。

編集後記

2011 Vol.02

【編集・発行】長崎大学広報戦略本部全学同窓会支援室
〒852-8521 長崎市文教町1-14

TEL 095-819-2154 E-mail zendousou@ml.nagasaki-u.ac.jp
FAX 095-819-2156 URL http://www.nagasaki-u.ac.jp

評価コメントの小特集を組んでみました。これからも同窓生の皆様に長崎大学の動きについてより多くの関心をもっていただけるよう、大学のさまざまな話題をお伝えしていきます。これからもよろしくお願いいたします。

一連の迅速な活動は、大学の同窓の一人として誇りです



釣船崇仁先生
(長崎県医師会常任理事 災害担当)

長崎大学の学生は昔から何事も自主的に先頭に立って行動する人が多い。それが伝統のようなものでした。しかし、果たして今でもそうだろうか?と想着いたら、今回の大学の迅速な対応や学生の活躍は素晴らしい。先輩として誇りに思います。長崎は災害が起こりやすい県であることを我々は知っていますが、これからの担う学生たちも被災地を見て感じて学んだことを、いざ長崎で災害が起こった時に役立てて欲しいですね。長崎県医師会も、被災地として福島を支援するため、現地への医療チーム派遣など、大学と連携しながら活動しています。「長崎県が行かないでどこに行くんだ!」という皆さんの強い想いを実感させられた活躍ぶりでしたよ。

大学生は災害ボランティアとして極めて重要です



旭 芳郎さん
(NPO法人
島原ボランティア
協議会理事長)

私は普賢岳噴火災害の経験を活かし、ボランティアの仲間たちと被災地支援に足を運びました。実際に行動を起こしてわかるのは、人には得手不得手があり、専門分野での活動と、それ以外の活動など、自分のできることをやればよいということ。時間の経過により活動内容は刻々と変わります。そういう意味で、大学生は、あらゆる分野で災害ボランティアとして重要です。長崎大学の学生も各自で現地入りしているようで、頼もしいですね。またいち早い長崎丸の対応は、現地のニーズにあった素晴らしい動きでしたし、DMATも生命に直結する特筆すべき活動だと思います。

福島県出身者として本当にありがたいと思いました



姉川タイ子さん
(福島県須賀川市
出身、長崎市在住)

新聞に入っていたチラシで、長崎大学で学生たちによる被災地支援の市民フォーラムがあると知り、足を運びました。私自身は福島出身なので、毎日テレビなどで被災地の状況を見るにつれ、辛くて辛くて……。近くになれば瓦礫のひとつでも取り除きに行きたい、という思いの中、長崎大学の学生さんたちが長崎丸で福島に支援物資を運んだことを知り、大変感動しました。誰も行きたくない福島に、長崎の人々が入って活動してくれている。涙が出るほどありがたいことです。

長崎大学ってここまでやる大学だったんだ!と発見



安井秀隆先生
(県立高校教諭)

教室に置かれた「Choho」の特集記事。読みはじめた瞬間、「長崎大学ってここまでやるんだ!こういう大学だったんだ。長崎大学はすごい」と思うと同時に、そのすごさを今まで自分はよくわかっていなかったのではないかと、反省しました。水産学部は国内でも数少なく、医学部の被ばく医療の研究や熱帯医学研究所は世界でもトップレベルというのは知っていましたが、中身はほとんど知らず、今回の特集でその一端を知ることが出来ました。これからも積極的に長崎大学のすごさを発信してほしいですね。

特集 ● 長崎大学は東日本大震災で何をなしてきたか
「私はこう見た!」

長崎大学の支援活動について一般の方々やOBにお伺いしました。

山下先生の被災地の医師としての使命感に感動しました



錦織祐一さん
(毎日新聞大阪本社
神戸支局記者)

東日本大震災が起きたとき、私は長崎支局の勤務でした。その後神戸に転勤となりましたが、縁あって、長崎大学の広報誌「Choho」を読む機会がありました。特集を読んで思ったのは、長崎大学が、恐らく日本の中では最も被災地支援に貢献している大学の一つであるということ。これは声を大にして語っていい。広報誌の中では、福島で大活躍されている山下俊一先生のインタビューをはじめ、長崎大学の150年の蓄積が今回の東日本大震災において存分に発揮されていることが体系的にまとめられ、大学の魅力がしっかり伝わってきます。山下先生の被災地の医師としての使命感には感動しました。この号は、永久保存版決定!

学生だからこそ良い経験として生きるでしょう



原田宏子さん
(長崎市
市民協働推進室)

未曾有の災害に対して、できることはなんなのか?—それは現地に行ってみないとわかりません。そこで、すぐさま行動した長崎大学を、同じ長崎に住む市民として誇りに思います。参加した学生たちに対しては「学生のうちに良い経験をしたねえ。その経験を少しでも多くの人に伝えて、災害を通してさまざまなことを考えるきっかけにしてほしい」と言いたいですね。行った人が伝える、聞いた人が考える、そしてみんなで行動をする。今回の災害を他人事としないために、多くの人を巻き込んで考える機会を提供してほしいと思います。

こんな大学に子どもを行かせたいと思うのでは



竹村義隆さん
(長崎県私立中学
高等学校PTA連
合会会長、飲食店
グループ経営)

青雲高校の先生から「Choho」をいただき、自宅めぐっているうち、どんどん引き込まれました。被災地の痛みを知る長崎人として活動している先生方の思いや英断に、学生たちは反応したんだろうと思うと感無量。偏差値も重要ですが、何よりそういう人道教育のきちんとした大学に子どもを行かせたいと思う親は多いのではないのでしょうか。長崎大学はそれがしっかりしているという印象を持ちました。私自身は、同じ長崎人として我々は何ができるだろう、と奮い立つきっかけになり、飲食サミットなどイベントを通じて被災地支援を始めています。



Choho36号

7月1日に発行された長崎大学広報誌「Choho(チャーホー)36号」。14ページにわたって特集「東日本大震災で長崎大学が果たした役割」を展開し、大きな反響を呼び起こしました。被災地の医療拠点でのレポートや長崎丸の活動ルポ、山下俊一先生のインタビューなど盛りだくさん。この冊子を読んで長大の活動を知る方々も多かったようです。

長崎大学のホームページに掲載されています。
<http://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/about/info/publicity/036.html>